

# 新歴史の見える風景

水戸天狗党新保本陣跡

指定史跡として今も残る  
武田耕雲齋の本陣

敦賀市新保



▲天狗党の本陣となった旧塚谷家の一部（書院部分）は史跡として保存されており、自由に見学できる。



本陣（書院）内部、玄関の式台の奥の下段の間と上段の間

敦賀市新保に、今も旧家跡の一部が残されている。塚谷彦太夫宅は、問屋を営み、蓮如上人の御影道中の宿としても知られた旧家である。書院造りの門をくぐると、式台、下段の間、上段の間が続ぎ、式台の柱上に組まれた三斗の組物が、往時の格式の高さをいまに伝える。昭和34年10月5日、敦賀市指定史跡となった。

この書院に、幕末の動乱が及んだ。武田耕雲齋を首領とした水戸天狗党八百余人は、禁裏御守衛総督・一橋慶喜を通じて朝廷へ尊皇攘夷の志を訴えるべく、元治元年（1864）11月1日、京へ向けて水戸を出発した。中山道を進んで美濃鵜沼宿付近まで到達したが、幕府軍に行く手を遮られ、北方への迂回を余儀なくされた。美濃と越前の国境、蠅帽子峠を越えて越前に入ったのは12月4日（西暦1865年1月1日）のことである。越前路を南下した一行は今庄に二泊のち木の芽峠を越え、12月

11日、最期の地となる敦賀へ入った。そして新保宿、塚谷家の書院に本陣を置いた。

しかし葉原の先には、幕府の命を受けた加賀藩が迎撃態勢を整えて待ち構えていた。進軍が困難と判断した天狗党は、同じく戦闘を望まない加賀藩軍監・永原甚七郎の奔走と説得に応じ、12月17日に投降した。耕雲齋と永原が降伏の条件を話し合った談合の場も、この書院であった。

降伏した天狗党を加賀藩は敦賀の寺院に収容して厚遇したが、幕府軍に身柄が移されると処遇は一変した。厳寒の罫倉に監禁され、翌元治2年2月4日、耕雲齋ら幹部24名が斬首、その後順次352名が処刑された。水戸では反天狗派と天狗派による報復の連鎖が続ぎ、両派合わせた犠牲者は推定3、500人以上にのぼったとされる。幕



末維新時の屈指の悲劇といわれる。

嵐が去った後も塚谷家は問屋として新保宿に残った。明治20年、木の芽峠越えに代わる海岸沿いの新道（春日野道）が開通すると往來は急減し、問屋業は縮小していった。明治35年、隣接地に温泉が掘り当てられると、塚谷家は温泉旅館へと転業した。新保温泉は1日200トンの鉱泉が湧き出し、皮膚病などに効があると地元で親しまれた。昭和初期の新保温泉に関する旅行記には、塚谷家は「武田耕雲齋宿泊といういかめしい門のある家、蓮如上人御宿の立て札のある家」と記録されている。一方、温泉宿としての記述は見られない。このため、旅館業はこの頃には廃業したものと推定される。

昭和32年、北陸トンネルの掘削工事によって湯脈が断たれ、新保温泉は廃湯となったが、天狗党の本陣となり、湯治客を癒やした塚谷家の書院は、今も往時の姿をとどめている。

（文 奥山秀範）



戦前の新保温泉絵葉書。右側に写る桑野旅館の建物は現存している。



悲劇を今に伝える罫倉、現在は天狗党墓の隣接地に移築されている。